

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 186 号	氏 名	THEPBUNDIT CHIDCHANOK
論文題目	日本語中級レベルの交換留学生同士のコミュニケーションにおけるセミオティック資源の使用 — 共同での料理場面に着目して —		
(論文審査概要) 本論文は、母語話者の言語使用を「規範」とし、そこから離れたものを「逸脱」と捉える枠組みに対する批判的観点から、多言語・多文化的環境における従来と異なるコミュニケーションの可能性を検討している。具体的には、日本語中級レベルの交換留学生による共同での「料理場面」に着目し、彼らがどのようなセミオティック資源（言語資源、ジェスチャー、モノ、においなど）を用いているのか、多様なセミオティック資源がコミュニケーションの中でどのような役割を果たしどのような場面で活用されているのか（リサーチクエスション）を明らかにした。 第一章では、母語話者（NS）と非母語話者（NNS）のコミュニケーション、および NNS 同士のコミュニケーションに関する既存の研究を整理・分析した。また、「やさしい日本語」および「共生言語としての日本語」の意義と限界について詳述した。 第二章では、多言語・多文化社会におけるコミュニケーションの多様な可能性を検討するための理論的枠組みとして、「言語の汽水域」「メトロリンガリズム」「トランスランゲージング」「コードスイッチング」「ブリコラージュ」といった概念について、それぞれの特徴や相違点を整理した。また、コミュニケーションにおいて即興性・柔軟性・創造性の発揮の程度を左右する要素として「場のセミオティック資源」と「個人の意味生成能力」という二つの要素を提示した。 第三章では、本論文における「料理場面」の特性について検討した。共同料理という実践は、言語資源のみによって成り立つものではなく、視覚・触覚・嗅覚といった感覚的要素や、調理器具・食材といった物理的な資源が密接に関与する、文化的かつ状況依存的な行為である。さらに、調理過程には予測困難な展開や即時的な判断が求められるといった特徴を詳述した。 第四章では、本論文でのデータ収集と分析方法について詳述した。 第五章では、第二章で示した「場のセミオティック資源」と「個人の意味生成能力」という、即興性・柔軟性・創造性の発揮の程度を左右するふたつの要素を観点として、リサーチクエスションの答を導くための調査・分析を重ねた。言語資源、ジェスチャー、モノ、におい、という個別のセミオティック資源について分析した後、個々のセミオティック資源間の関係性についてまとめた。 第六章では、各章で得られた知見を整理し、全体をまとめたうえで、本論文の理論的および実践的な貢献について述べた。最後に本論文の限界と、それを踏まえての今後の課題について展望を記した。 本研究において観察された場面を通して、言語的・文化的背景の異なる者同士が、即興的かつ柔軟にセミオティック資源を創造的に組み合わせながら、状況に応じて多様な意味を構築していることが確認された。交換留学生たちは、時に既存の言語規範にとらわれることなく、その場の状況に応じて新たな表現を創出しており、これは、既存のメトロリンガリズムの理論とも整合する。「ことば」は「混合」「切り替え」「創出」を通じて再構成されており、そうしたプロセスからは、言語資源や身体的表現に加え、「場」に存在する多様なセミオティック資源が、相互に作用しているダイナミズムが明らかになった。 特に、こうした資源が集まり、活用される「場」そのものが、意味の創出を支える基盤として機能していることを明らかにした点は注目に値する。本論文は、「ことば」が本質的に流動的であること、そしてその「場」にある資源を使いこなすこと自体が「能力」とであると主張している。			

1. 創造性

セミオティック資源やメトロリンガリズムに関する先行研究を理解・整理したうえで、調査・分析の対象としては新規性のある文脈（友人、知人同士での共同での料理場面）を採用している。理論的意義としては、とりわけ、簡単なものであっても「相手の言語」を使用することの重要性とその役割について明示できたことに価値がある。創造性の点では、特に優れている。

2. 論理性

予備審査で指摘のあった点に関して、博士学位請求論文では適切な修正がなされている。あわせて、とくにNSとNNSの使用するストラテジーに関して、記述の論理関係が明確になった点が評価できる。論理性の点においては、優れている。

3. 厳格性

予備審査では調査概要やデータの開示に関して指摘があったが、学位請求論文では、その点に関して大幅な改善がなされ、調査結果の妥当性と信頼性が高まっている。また、「言語能力」と「ことばの能力」を区別し、それぞれを明確に定義することで、本研究における言語能力感がより明確に提示されたものと判断できる。以上より、厳格性の点においては、優れている。

4. 発展性

言語的、文化的背景を大幅に異にするもの同士でのコミュニケーションの機会は、日本では今後、さらに増えていくことが予想される。そのなかで、本研究の提示する知見は、理論面、実践面の双方においておおきな可能性を持つ。また、本論文の分析枠組みや手法は、日本語を基本的な共通言語とする場面だけでなく、たとえば申請者の母語とするタイ語を基本的な共通言語とする場面においても、応用が可能である。以上より、発展性の点では、特に優れている。

以上より、審査委員会における審査委員の合議によって、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

☒ 合 ・ ☐ 否

審査委員 主 査 (氏名) 山本 新里

(氏名) 石井 由理

(氏名) 高橋 俊章

(氏名) 有元 光彦

学位論文要旨

学位論文題目 日本語中級レベルの交換留学生同士のコミュニケーションにおけるセミオティック資源の使用—共同での料理場面に着目して—

申請者氏名 THEPBUNDIT CHIDCHANOK

近年、日本に在留する外国人の数は増加しており、2024年6月末時点では3,311,292人に達している（出入国在留管理庁、2024）。そのうち、留学生は368,589人を占めており（同、2024）、今後もこの傾向が続くことが予測されている。このような状況を背景に、日本社会や高等教育機関においては混淆的な形で使用される多言語の存在がより顕著になりつつある。

しかしながら、従来の外国人や留学生に関する研究の多くは、日本語のみあるいは英語のみなどでのやりとりを主な分析対象とし、この言語使用を母語話者の「規範性」に基づいて評価する傾向がある。その結果、既存の規範に適応できない、あるいはそれに従わない非母語話者による言語実践は、「逸脱」として扱われやすい。

母語話者の言語使用を基準とする「規範的な」評価枠組みには、非母語話者とのあいだに暗黙の力関係が前提とされている可能性がある。この枠組みにおいては、母語話者の言語能力が相対的に「優位」に、非母語話者が「劣位」に位置づけられがちである。その結果として、非母語話者による即興的で柔軟かつ創造的な言語実践が、実際にはコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしているにもかかわらず、十分に評価されていないという懸念がある。

このような「規範性」を基盤とした枠組みに対する批判的視点から、本研究では、多言語・多文化的環境における従来と異なるコミュニケーションの可能性を検討する。そのためには、松田（2023）が提唱する「言語の汽水域」（コンタクトゾーン）の詳細を明らかにすることが必要であるという判断のもと、具体的には多国籍の日本語中級レベルの交換留学生が共同生活を営むシェアハウスにおける「料理場面」に着目した。料理という実践は、言語資源のみによって成り立つものではなく、視覚・触覚・嗅覚といった感覚的要素や、調理器具・食材といった物理的な資源が密接に関与する、文化的かつ状況依存的な行為である。さらに、調理過程には予測困難な展開や即時的な判断が求められる。

本研究の目的は、このような「料理場面」において、日本語中級レベルの交換留学生が共同生活を送るシェアハウスのキッチンにおいて、どのようなセミオティック資源（言語資源、ジェスチャー、「モノ」、においなど）が、コミュニケーションの中でどのような役割を果たし、どのような場面で活用されているのかという問いに答えることである。

分析の結果、観察されたセミオティック資源は言語資源、ジェスチャー、「モノ」、においの4種類に分類された。言語資源はさらに、共通言語、「相手の言語」、自身の母語の3つに分類され、それぞれが意味交渉、笑いの誘発、感情表現、関係構築などの多様な機能を担っていた。特に「相手の言語」は、返礼や配慮、仲間意識の形成といった役割を果たし、言語熟達度にかかわらず関係性を深める有効な手段として機能していた。ジェスチャーは、言語資源による情報伝達を補完し、理解の確認や会話の流れの調整に寄与していた。「モノ」は、スマートフォンや料理、色などが視覚の手がかりや文化的共有の媒体として活用され、においは、感覚的情報の伝達、記憶の喚起、文化的なつながりの媒介として機能していた。

観察された場面を通して、言語的・文化的背景の異なる者同士が、即興的かつ柔軟にセミオティック資源を創造的に組み合わせながら、状況に応じて多様な意味を構築していることが確認された。交換留学生たちは、時に既存の言語規範にとらわれることなく、その場の状況に応じて新たな表現を創出しており、これは Otsuji & Pennycook（2010）のメトロリンガリズムの理論とも整合する。

「ことば」は「混合」「切り替え」「創出」を通じて再構成されており，そのプロセスからは，言語資源や身体的表現に加え，「場」に存在する多様なセミオティック資源が，相互に作用しながら言語が生成されていくダイナミズムが明らかになった。

特に，こうした資源が集まり，活用される「場」そのものが，意味の創出を支える基盤として機能している点は注目に値する。これらの実践を通じて，Pennycook & Otsuji (2015a) が指摘するように，「ことば」が本質的に流動的であること，そしてその「場」にある資源を使いこなすこと自体が「能力」とあるという視点が導き出される。これは，本研究における重要な知見の一つである。

キーワード： 交換留学生，料理場面，メトロリンガリズム，複言語使用，セミオティック資源